

パネル・ディスカッション「戦後思想における全国唯研の歴史と現代の課題」報告

唯物論とフェミニズムとの対話

浅野 富美枝 ASANO, Fumie

私に与えられたテーマは、「唯物論とフェミニズムとの対話」です。唯物論とフェミニズムは、ともに近代の初期に、近代を超える萌芽を内包して生まれた、言わば「近代の鬼子として生まれた」という共通の出自をもっているにもかかわらず、このテーマからもうかがえるように、必ずしも両者の間に友好的、あるいは共通のテーマに関して対話があったわけではありませんでした。少なくともわが国について言えば、両者の間に対話が成立したのは、ここ20年くらいのことだと思います。両者の間の対話の成立を阻んでいた理由は、大きくいえば二つ考えられると思います。一つは、フェミニズムの根本問題である女性抑圧、性抑圧との関連ではずすことのできないテーマである家父長制や性について、唯物論の側では主要なテーマにはなりえないものとして捉えていたということがあります。もう一つは、今のことと結びついているのですが、いわゆる「マルクス主義婦人論」とフェミニズムの理論的な対立が、政治的な対立として立ち表れたという不幸な歴史があって、これが対話の成立を妨げていたのではないかと思います。このことは両者にとってだけでなく、女性／男性たちにとっても大きな損失となりました。

* * *

その両者の関係が変わってきたのは1980年代後半だったと思われまます。全国唯研ができる前の、全国の唯物論研究者の組織的再結集のために、有志の手で発刊されたとされる『唯物論』(1973-1979年2刊 創刊号-11号 汐文社)では、女性、家族、性をテーマとした論文・書評などはまったくといっていいほどみられませんでした。

そのような状況に変化が見られ始めたのはこの

全国唯研(1978年7月25日発足)ができてからのことでした。『唯物論研究』(1979-1984年2刊 創刊号-11号 汐文社)では、女性・家族問題がみられるようになりました。

『唯物論研究』創刊号(1979年11月 汐文社)の、唯物論研究協会委員長(湯川和夫)の創刊の辞にはこうあります。

「唯物論を研究するということは、複雑で矛盾に満ちた今日の現実を、ありのままに、しかし、同時にまた根本的にとらえなおすことであります。(中略)エネルギー問題や公害問題・人権問題が、ある意味では体制や階級をこえた問題であることは確かですが、しかし、また決して大勢や階級とかかわりのない問題ではない、ということも明らかだと思います。この辺のところを、じゅうぶん具体的に見きわめながら、問題解決の方向を究明しなければならぬ。教育の荒廃、家族・家庭・結婚・男女平等・性風俗などの問題についても、同様のことが言えるかと思ひます。

私たちの関心、わたしたちの問題意識の根底にあるもの、つまり、わたしたちの共通の価値意識—それは人権と民主主義の理念であります。」

この創刊の辞が花開くのは、『思想と現代』(1985-1995季刊 創刊号-40号 白石書店 ただし、38-40号は柏書房)になってからで、『思想と現代』ではフェミニズム・女性・家族問題は主要なテーマの一つと位置づけられるようになりました。

『思想と現代』では、フェミニズム関係の特集が二度組まれました。一度目は1987年3月の8号(大特集「性—欲望と制度」)で、二度目は1990

年7月の22号(特集「フェミニズムと唯物論」)でしたが、この二つの号は、大変象徴的な受け取られ方をしました。

8号の特集は次号の読者の声「こだま」欄で賛否両論、大きな論議を呼びました。同欄では「一つの壁を破った特集」「今後ともこのような新しい企画で貴誌が充実されることを望みます」という好意的な声のほか、同欄の冒頭では「『性』特集に違和感」と題して、次のような声が掲載されています。

「第8号『大特集・性(セックス)——欲望と制度』について、違和感を感じます。エッセイのテーマ『性・快楽・唯物論』という設定も首をかしげざるを得ません。(中略)

小生の違和感というのはこの雑誌が私たちの全国唯研の機関誌であるからで、このような特集の組み方は小生の抱いている唯研機関誌のイメージとははるかにへだたるものです。(中略)『性』の問題が人生において重要なテーマであり、誰も無関心でいられない問題であることは言うまでもないでしょう。(中略)しかし哲学的には第一義的問題とは思われず、第二義的以下の問題だと思えます。

矛盾に満ちた政治的社会的状況が提起する諸問題、そこから生じる哲学的問題が数多くあるわけで、そのような諸問題を正面から切り結ぶテーマを今後希望したいと思います。」

他方、22号の〈前号批評〉では、特集に対して、次のような感想が寄せられています。

「これまでマルクス主義の思想と運動は、このフェミニズムの運動に十分対応しきれていないうらみがあった。その意味で、今回の特集は時宜をえた、意欲的なとりくみであった。特に、現在活躍中の上野氏を招いての対談は、仲間内ではない、他流試合のおもむきもあり、はたしてどのような議論になるのだろうか、興味をもって読み進むことができた。」

このように、1987年と1990年とわずか3年へだてたにすぎないにもかかわらず、両号に対す

る反応はかなり大きな違いがみられます。1985年の女性差別撤廃条約批准を経て男女平等への高まりが大きくなると同時に、フェミニズムの問題提起がアカデミズムを超えて受け入れられつつあるなかで、唯物論の中でもフェミニズムが提起した問題の重要性に覚醒を開始したことがここからうみることができます。

とはいえ、22号の段階では、フェミニズムと自然体で対話をするというよりも、意識的にかまえてフェミニズムのテーマをとりあげようとしている様子がうかがえ、〈対話〉といってもどこことなくぎこちなく、お互いに様子をうかがっているようなところがみられました。

* * *

両者が自然体で対話ができるようになったのは、『唯物論研究年誌』(青木書店 創刊号-11号 1996年-2007年)からではないでしょうか。『唯物論研究年誌』になってからは毎号、特集論文の中にフェミニズム視点の論文がレギュラー的な性格をもって登場するようになりました。これは『思想と現代』がいわば「女がすなるフェミニズムというものを男もせんとて試みるなり」という印象を与えたのに対し、『唯物論研究年誌』では、特集テーマを深めるための不可欠な論文のひとつとして、その論文があることが当然のこととして登場しているように思われます。おそらくこの時期からは、現代が提起するテーマを深めるためには、フェミニズム・ジェンダーの視点が不可欠であるとして位置づけられるようになったのではないかと思います。したがってここでは、唯物論とフェミニズムが向き合って対話するというよりも、共有するテーマに対して相互のスタンスから語り合う、いわば同じ方向を見つめつつ、肩を並べて共有するテーマを語り合うという姿勢になり、対話がスムーズに、自然な形で成立するようになったと感じられるのです。

* * *

フェミニズムとの対話ということを語ると、当然のことながら、では、いわゆる「マルクス主義的婦人論」との対話はどうだったのかという疑問が一方で出てくると思います。

率直に言うと、いわゆる「マルクス主義的婦人論」の潮流の研究が唯研のなかで主流を占めたことは一度もなかったのではないのでしょうか。そしていわゆる「マルクス主義的婦人論」と唯物論の対話ということも、時折「マルクス主義的婦人論」の視点からの論文が掲載されるといったことはもちろんありましたが、それ以上ではなかったように思われます。なぜそうだったのか、これはこれで考えなければならないことだと思いますが、とりあえず今の段階で言えることは、これが唯研を〈男性社会〉にしてきたのではないかということです。唯研が〈男性社会〉だということは、他の学会と比較しても会員の女性比率がきわめて低いことから明確に言えると思います。

しかしまた、このことが逆に同時に、フェミニズムを許容する、あるいはフェミニズムの問題提起に誠実に対応するという土壌を形成することにもなったといえるのではないかと私には思われます。今日唯研は、現代社会が提起している問題・テーマを探求するにあたって、ジェンダーの視点からの探求をごく自然体で受け入れています。それは唯研が最も得意とする労働分野というより、唯研があまり得意としなかった分野、性とセクシュアリティの分野の研究において顕著で、しかも女性研究者が少ない唯研では男性研究者が男性論の視点から探求しているところに特徴があります。実際、唯物論は、唯物論が弱点としていた性とセクシュアリティの分野に果敢に挑戦することにより、フェミニズムの領域に謙虚に・果敢に入っていくことができました。他方フェミニズムの側は、男性論の視点という新たな視点からの性とセクシュアリティの問い直しを、これまでのフェミニズムをより豊かにしていくものとして率直に受け入れたのだと思います。このことが唯物論とフェミニズムとの自然な対話の可能性を切り開いてきた

のではないかと思います。

今日、フェミニズムが問題提起したテーマは、ジェンダーの視点からの研究へとさらに歩を進めています。そのためには男性学の視点が不可欠です。先のような唯物論の側の状況は、他方でジェンダー研究の世界で唯物論にオリジナルな位置を作り出しているのではないかととも思われます。現在混迷を深めているフェミニズムが唯物論から何を学んでいるのかは、これはこれで対話によって明らかにしなければならないことですが、少なくとも唯物論および唯研にとっては、このようなフェミニズムとの対話の成立は重要な意味があったと私は考えます。

なお、さらに付け加えれば、唯物論とフェミニズムとの対話が形成されている性とセクシュアリティの分野は、率直に言って「マルクス主義的婦人論」には弱い分野であり、したがってこのテーマをめぐる〈三つ巴の対話〉が形成されるにはいたりませんでした。課題があるとすれば一つは実はこの点で、ジェンダーの視点での労働分野の探求が、将来的には〈三つ巴の対話〉として成立・発展していくことが求められているのではないかと私は考えます。そのときに唯研がどのような役割を果たしうるのか、おおいに関心があります。